

# One aspect of the composite auxiliary verb "Nam" (Nu+Mu) · "Tem" (Tsu+Mu)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/47020">http://hdl.handle.net/2297/47020</a>

## 複合助動詞「ナム」(ヌナム)・「テム」(ツナム)の一側面

—源氏物語を中心に—

近藤 明

## —はじめに—

本稿で「ナム」(ヌナム)・「テム」(ツナム)と称するのは、次のようにいわゆる完了の助動詞「ヌ」「ツ」に「ム」が下接したものである(用例の引用に際して傍線の箇所以外は表記に適宜手を加えた)。

惟光「夜は明け方になり待りぬらむ。はや帰らせ給ひなむ」と  
聞こゆれば (源氏物語 夕顔 源氏物語大成 一三四⑪)

「かばかりになりては飛びおるともおりなん」

(徒然草 一〇九段 旧日本古典文学大系 一七八⑬)

梓弓おして春雨今日降りぬ明日さへ降らば若菜摘みてむ

(古今和歌集 卷一 春上 二〇 新日本古典文学大系)

「(「しろうるり」というものが)もしあらましかばこの僧の顔に似てん」(徒然草 六〇段 旧日本古典文学大系 一四〇⑥)

以下、他との識別で特に必要のある場合を除いては「ナム」「テム」と称することとする。従って本稿で単に「ナム」と称する場合、係助詞「ナム」や終助詞「ナム」ではなく、右記のものを指すことになる。

この「ナム」「テム」や、「ツ」「ヌ」に「ベシ」が下接した「ヌベシ」「ツベシ」は「ツ」「ヌ」に推量系助動詞が下接している点で共通性を有するが、「ヌベシ」「ツベシ」については山本佐和子(二〇二二)

が近年の注目に値する論と言える一方、「ナム」「テム」については伊藤慎吾(一九七八)における言及や近年では井島正博(二〇二二)でも論じられているが、なお他の角度からの検討の余地が存するよう思う。

またこれらの場合の「ツ」「ヌ」の働きが「確述」と説明されることがあるが、その「確述」とはどういうことであるのかや、そもそも「確述」と規定することの適否等の問題も、川上徳明(一九七三)等がありはするが、従来十分掘り下げられて来たとは言いがたい。

松村明編『日本文法大辞典』(明治書院 一九七二)「なむ」の項(吉田金彦執筆)では「①表現主体の意志・決心を表わす。／②外界の事象に対して予測・推量の意を表わす」に加えて③として「敬語とともに用いられて相手に勧奨する意を表わす」として、前掲の源氏物語夕顔巻等の例を挙げ、更に「④可能・容認の意を表わす」として前掲の徒然草一〇九段の例等を挙げている。

また同じく「てむ」の項においては「①主体の意志・決心の意を表わす。／②第三者に対する疑念・推量の意を表わす」に加えて、③「可能的推量の意味を表わす」として前掲の古今和歌集二〇番歌の例等を挙げている。同辞典では「ナム」の③に相当する用法が掲げられていないが、川上徳明(二〇〇五)や藤原浩史(二〇一四)は「テム」にもそのような用法を認めており、これを追加するのが適切であろう。

ここで、「ナム」「テム」の意味とされるものを改めて大別すると  
 I 「意志」「推量」系の意味（『日本文法大辞典』における「ナム」「テム」それぞれの①②）  
 II 「可能（的推量）」の意味（同じく「ナム」の④、「テム」の③）  
 III 「勸奨」「依頼」等の对人的働きかけに関わる意味（同じく「ナム」の③）

の三つに整理できるかと思うが、

① 「ナム」「テム」の意味・用法は、「ム」が「ヌ」や「ツ」を介さずに単独で動詞に下接した場合と比べて、どのような点で共通性を有し、どのような点で異なるのか。また「ナム」「テム」の各種の意味・用法は、相互にどのような関連性を有するのか。  
 ② 「ナム」「テム」に特有あるいは特徴的な意味・用法と見られるものは、なぜ「ヌ」「ツ」が加わることでそうなるのか。「ヌ」「ツ」と「ム」の意味の足し算での理解が可能なものなのか、否か。

といった点が問題になりそうである。より具体的には次のような点の説明が必要であろう。

① I の「意志」「推量」系の意味は、大きな区分としては「ム」単独の場合と共通するが、「ム」が単独でそのような意味で用いられた場合と比べて、どのような相違があるのか。「確述」といった説明は有効か。

② II の「可能（的推量）」の意味は、「ナム」「テム」特有のようであるが、なぜ「ナム」「テム」にはこのような解釈の可能な用例が存在するのか。

③ III の意味は、「ム」の「勸誘・命令」等と言われるものとの関係が考えられそうであるが、それとはどのような相違があるのか。

なお古代語の危惧表現形式をめぐる筆者の一連の論、とりわけ近

藤明（二〇一三）（二〇一四）においては、「モゾ」「モコソ」以外に古代語で危惧の意を担う形式の候補として、「ヌベシ」「ツベシ」や疑問推量系の形式とともに、「ナム」が挙げられる場合があった。従って

④ 「ナム」（あるいは「テム」にも）に「危惧」の意に関与する側面があるとしたら、それは「ナム」「テム」の諸用法の中にどのように位置づけられるのか。

という問題も、加えて提起されることになる。

本稿では第三・四節で④の点についての検討を行い、第五節で⑤⑥等、関連する他の問題点にも（第三・四節での検討結果から及び得る範囲内ということになるが）考察を及ぼしていくこととする。具体的には源氏物語を資料とし、特に第三・四節ではそこで用いられている「ナム」「テム」を上接動詞ごとに見て、同じ動詞に「ム」が単独で下接している場合等とも比較し、「ナム」「テム」の用いられ方に目立った傾向の見られるものを中心に考察を進めていく。

なお以下「ナム」「テム」を検討していく場合、原則的に文末用法で用いられているものを分析対象とする。連体・準体といった文中用法の場合、「婉曲」「仮定」といった意に解されることがあり、先行研究との兼ね合いも考慮し、そのようなものはひとまず除外して考察を進めたいとの考えからである。また文末用法のうち疑問表現と組み合わさった疑問推量形式をとっているものも、後述するような危惧の意との兼ね合いから、分析対象から除いておくものとする。

## 二 「ナム」「テム」の上接動詞

本稿では「ナム」「テム」の上接語が動詞である場合を考察対象とするが、どのような動詞が上接するかを一瞥しておく。

源氏物語における「ナム」「テム」の上接語については、伊藤慎吾（一九七八）等にも言及があるが、本稿での分析対象となる用例が複数ある動詞を次に掲げておく。敬語の補助動詞・助動詞等を介して「ナム」「テム」が下接する場合も考察に加えるべきところであるが、用例の抽出・分析に十分に手が回らなかったため、除外してある（比較の対象として同じ動詞に「ム」が単独で下接しているものを取り上げる際も同様）。

#### 【「ナム」の上接動詞】

あり21 やむ14 出で来10 参る・なる各6 帰る5 つかうまつる・まかづ各4 おはします・とく各3 出づ・失す・うつろふ・おはしつく・変る・消ゆ・さすらふ・住みはつ・命つく・寝・まかる・参り来・乱る各2

#### 【「テム」の上接動詞】

過ぐす・過ごす5 許す4 変ふ（下二段）・す・迎ふ・渡す各3 聞こゆ・かへしやる・聞こゆ・しなす・つかうまつる・なす・まぎらはず・見果つ・もてなす・渡す各2

これらの中から、ある程度まとまった用例数を有するもの、「ナム」「テム」が下接した場合の意味に特徴を見出しやすいものを選んで、次節で論じていくことにする。具体的には「ナム」は「出で来」「あり」「つかうまつる」「参る」「やむ」「なる」に下接した場合、「テム」は「変ふ」「渡す」「許す」に下接する場合を取り上げることとし、第三・四節ではこれらの具体的な分析を行う。なお以下の考察において、源氏物語の用例の引用は源氏物語大成校異篇によるが、直接問題とする語（傍線を施してある部分）以外は、表記に適宜手を加えた。

### 三 「ナム」の分析

#### 三・一 主に推量の意で用いられているもの

##### 【出で来+ナム】

まず、推量の意に集中するものとして、上接動詞が「出で来」である場合（以下「出で来+ナム」のように表記）を取り上げる。「出で来+ナム」は、本稿における分析の対象となる用例が10例存在し、いずれも推量の意と解されるが、内訳は

終止形単独4 「ト・ナド」下接4 「カシ」下接2

である。これらの用例において目につくのは、「出で来」の主体が軽々しきこと<sup>2</sup> よからぬこと・いみじきこと・わづらはしきこと・うたであること・けがらひ・誰か障子はあけたりしと各1

と、望ましくない内容のものである場合が、9例を占めることである。例えば

①「もの聞こえあらば、誰か障子は開けたりしと、かならずいできなん」  
（蜻蛉 一九六六<sup>⑫</sup>）

は、女一の宮が隙見をされたという評判がたつと、誰か障子を開けておいたのか問題になることを、女一宮の女房が懸念する場面である。ここでひとまず、これらの用例における推量の性格を

(a) 望ましくない事態が起きることに対する推量  
ということにしておこう。

右の(a)に該当しないのは、「出で来」の主体が「まつはしならひ給ひにし方のあはれなること」である1例のみで、これは女三の宮との関係が露見したことを気に病んで発病し死の床にある柏木が

②「年ごろものををりふしごに、まつはしならひ給ひにし方のあはれもいできなん」  
（柏木 一二二八<sup>⑬</sup>）

と、死後には源氏も許してくれるだろうとの考えを抱く場面であるが、女三の宮との出来事の罪深さを考えると、容易にそうなるとは考え難い面もある内容である。そのようになるのは難しいこと・支障があることを、強いてそのようになるかと推量する、といった用例と捉えておく。この例におけるような推量の性格を、ひとまず (b) そのように考えるには困難の伴う内容の推量とする。

ではこれら「出で来+ナム」の用例に (a) (b) いずれかの性格が認められることは、「出で来」に下接するのが「ナム」であるが故の特徴なのであろうか。この点を考えるには、同じ動詞に「ヌ」を介さずに「ム」が下接したもの(以下「出で来+ム」と)との比較が有効と思われる。「出で来+ナム」と同じく、「出で来+ム」のうち疑問推量を除く文末用法のものを分析対象とすると、当該の用例は2例で<sup>(3)</sup>、それらの例での「出で来」の主体は

人笑へにうきこと・強き言 各1例  
である。

このうち前者の「必ず人笑へにうきこといでこむものぞとは」(宿木 一七〇八④) は、(a) に該当するであろうが、もう1例の

③ (源氏↓紫の上)「さし退きて花の蔭に立ち隠れてこそ、強きことはいでこめ」  
(少女 七二二④)

は、秋好中宮との応酬は、現在の紅葉の季節ではなく、春の花盛りの時期にすることを勧める発言における用例で、これは望ましくない事態ではないし、そう推量するのが困難な事態というわけでもなく、(a) (b) いずれにも該当しない。

同一資料内で比較の対象となる「出で来+ム」の例が少ない憾みはあるが、(a) に該当する例もある一方で、(a) (b) いずれにも該当しない例も認められる点は、注目しておいて良いと思われる。

【あり+ナム】

続いて「ナム」の上接動詞が「あり」である「あり+ナム」の分析に移るが、ここでは形容詞や「に」「と」「て」等に下接する補助動詞な「あり」は除き、モノ・コトの存在を表す「あり」に限るものとする。

小島聡子(一九九九)は、古今和歌集で「ナム」が「あり」に下接している場合、「すべて《推量》の意に解釈される」とするが、源氏物語でもこの点は同様で、分析の対象となる用例は21例全てが「推量」の意に解され<sup>(4)</sup>、内訳は

終止形単独5 「ト・ナド」下接8 「カシ」下接8

である。この他では「ヤ」を下接する「ナムヤ」の形が8例とまとまった数があるが、疑問推量系は除くという方針により、ここでの考察からは除外されることになる。

これらの例での「あり」の主体がどのようなモノ・コトであるかを見ると、

あらはなること・(この)むくひ・恥ぢがましきこと・見たてまつるやう(夕霧が女三の宮の姿を源氏の立場から)・心許し給ふをり(大君のことを薫の立場から)・たちまさること(一層の難局の意)・めざましきこと・めざましげなること・心苦しきこと・けおさるること・とまるかた(玉鬘の落ち着こうとすると先・目当てとする男性を源氏の立場から)各1

等は、望ましくないコトであり、前述の(a)に該当する例と言える。例えばこの中の「たちまさること」とは、須磨下向を控えた源氏が紫の上相手に

④「ひたおもむきにも狂ほしき世にて、たちまさることもありなん」  
(須磨 四〇三⑥)

と、一層の難局が生じることを懸念する場面でのものである。

一方「ありなむ」の主体が望ましい・あるいは中立的なコトである例としては

対面2・対面するやう・あひ見るほど・さるべきついで・語らひよる風のまぎれ・思ひかなひ給ふ時・見どころ・思ひなぐさむること各1

等が挙げられる。これらは(a)に該当しない例と言えるが、このうち

⑤⑥(源氏↓死の近い葵上)「いかなりとも、必ず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。大臣・宮なども(中略)あひ見るほどありなむと思せ」(葵 二九九①②)

は主体が「対面」と「あひ見るほど」である例だが、「いかなり」とは「死別しても」の意で、死別という障害・障壁を乗り越えて再び逢うことを推量するというものである。前掲の用例②と同様、容易にそうなるとは考え難いことを強いてそのようになると推量する、という点で、(b)に該当するものと考ええる。また

⑦(弁少将↓近江の君)「尚侍になろうという近江の君の願ひは、堅き巖も淡雪になしたまうつべき御気色なれば、思ひかなひ給ふやうもありなむ」とほほゑみて言ひる給へり。(行幸 九〇九⑤)

も「堅き巖も」から、困難を乗り越えてそうなることもあるだろうという趣旨の発言であると察せられ、(b)に該当する用例と見られよう。ただし

⑧(源氏↓玉鬘)「(蜚宮らが玉鬘に懸想するのは)見どころありなむかし」(蜚 八〇六④)

等、そのようには解されない例も少数ながら見られる<sup>5)</sup>。

一方、「又」を介さずに「ム」が直接「あり」に下接する「ありナム」は、分析の対象となる用例(「あり」が本動詞で「ム」が推量の意であることも条件となる)が意外に少ない。加えて、「あり+ナム」がいずれも未来推量と見られるのに対し「あり+ム」には未来推量ではない例も目立ち、その点も揃えて比較しようとする<sup>6)</sup>と該当の用

例は1・2例程度になつてしまふが

⑨「人として心にも、するわざにも、立ててなびく方は方としてあるものなれば、生ひ出で給ふさまあらむかし」(常夏 八四一⑦)

は、内大臣が、源氏が明石の姫君に行つてゐる教育を思い、しかし好みや性向が成長につれて現われてくるだろうと推測(未来推量)している場面で、話し手にとって好ましくないことの推量ではなく、そう推量することに困難・障壁が伴うものとも考えられない<sup>6)</sup>。

### 三・2 主に意志の意で用いられているもの

#### 【つかうまつる+ナム】

次に、意志の意に集中するものとして、上接動詞が「つかうまつる」である場合を取り上げる。「つかうまつる+ナム」は分析の対象となる用例が4例存在し、いずれも意志の意に解されるが、内訳は  
終止形単独3 「カシ」下接1

である。その中で

⑩「御大壺おほみおほつばとりにもつかうまつりなむ」(常夏 八四四⑨)

は、近江の君が、樋清の役をしても任せようという発言で、同じ近江の君が水汲み役でもしようという例(常夏 八四五⑬)もあるが、いずれも内大臣の娘という血筋からは「似つかはしからぬ役」(内大臣の発言)である。また

⑪「そのもてなしなどは、心の限りつくして、つかうまつりなむかし」(権本 一五七四⑩)

は、薫が勾宮と宇治の姫君たちとの仲介役を、勾宮は自分を恨んでいるし、その役を務めるのは「乱り足こそ痛からめ」とも思われるが、続けようというものであり、もう1例は横川の僧都が浮舟出家後も自分の健在な限りは面倒を見続けよう(手習 二〇三六⑩)というものであるが、いずれも困難・障害・障壁・抵抗があることで

も、それを乗り越えてしよう、というものと解される。

ここで用例⑩や⑪の意志表現の性質を、ひとまず

(c) 困難・障害・抵抗が伴う(と想定される)ことを、それを乗り越えて実行しようとする意志の表現

ということにしておく。

一方、「ヌ」を介さずに「ム」が直接「つかうまつる」に下接する「つかうまつる+ム」は、文末用法で意志の意のものが6例程見られるが、

⑫「とのゐもつかうまつらむと思ひたまへしを」(野分八七七②)は、野分の翌朝、明石の姫君が風を恐れたことを聞いての夕霧の発言で、⑬の近江の君のような突飛なことをしようというのではなく、顕著な困難・障害・抵抗が想定されることを実行しようという例ではないと判断される。

ちなみに「つかうまつらむ」には「テム」が下接した例も2例あり、そのうち「浮舟の出家は」今日つかうまつりてん」(手習二〇二七⑦)という例は、今夜中に一品宮のもとに行かなければならない中、浮舟が強い望むので今日出家の儀式を行おうという僧都の発言で、やはり(c)に該当する。

【参る+ナム】

「参る+ナム」は分析の対象となる6例のうち4例が意志の意に、他の2例は「勸奨」「適當」等の意に解され<sup>⑭</sup>、いずれも「ト」「トテ」を下接する。

⑬(夢に見えた桐壺院が、「内裏に奏すべきことあるにより」と「立ち去」るのに対し) 飽かず悲しくて「御供に参りなん」と泣き入り給ひて

(明石 四四五⑭)

は、夢枕に立った故桐壺院に対し源氏が「御供に参」ろうと言っている例で、古代人の意識としても、簡単に行えると認識されるのではなく、前述の(c)に該当する意志表現と捉えられるところ

はないか。

⑭「とく参りなむ」と急ぎ苦しければ

(濤標 四九一⑰)

は、姫君を出産した明石の君のもとに、京から乳母を送り届けに来た源氏の使らの発言だが、単純にすぐ帰ろうとの意向を示したというのではなく、明石君は「御使にも二なきさまの心ざしをつくす」とあり、そのような心づくしにも関わらず、逗留を遠慮して帰ろうとの意向を述べたものと考えられる。「二なきさまの心ざし」にもかかわらず帰京しようとするのは、ある種、困難・抵抗を乗り越えて実行することとも捉え得る。

他に「(勾宮の使い↓中の君)今宵参りなん」(総角 一六五一⑱)「薫の使いの小君↓妹尼」御返りとく賜りて参りなむ」(夢浮橋二〇六八⑲)は、返事を受け取ってから帰ろうとの意向を示している例で、困難・抵抗とまでは言えないが、果すべき任務を果たすという一定のハードル・障壁を超えた上で帰ろうという点で、右の延長上に位置づけられるかもしれない。

一方「ヌ」を介さない「参る+ム」は、分析の対象となる用例が10例程であるが、「末摘花のもとを去った人々が再び末摘花のもとに」我も我も参らむとあらそひ出づる人もあり」(蓬生 五四〇⑳)等、(c)にもその延長上にも全く該当しそうな例が見られる。

三・三 推量・意志双方の意で用いられているもの

【なる+ナム】

上接動詞が「なる」の場合、意志4例、推量2例で、内訳は終止形単独3 「ト・ナド」下接 3

であり、何になるのかという点に着目すると、

尼に4(意志4) 長きはだしと・何事も思ひ入れず各一(いずれも推量)

で、意志の意と解されるのは4例とも

⑮ 「(明石は) 思ふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむなどぞ思ひける」 (須磨 四三二⑥)

のような「尼になりなむ」である(明石・玉鬘・朧月夜・落葉の宮各一)。どれも高齢になったり重病で死期が近いことを悟って出家しようというのではなく、右の明石や玉鬘は未婚であるし、落葉の宮は夫の柏木(更に母の一条御息所)に先立たれた立場ではあるが、まだ若く母御息所には夕霧との再婚の期待を持たれたり、父朱雀院に出家をとめられたりしている。このような立場の女性が出家することは、高齢や重病の場合と比べて自身のためにも少なからずあるだろうし、右の落葉の宮の場合のように周囲の反対・抵抗も想定される。そのような困難・障害・抵抗を乗り越えて出家しようという意志を表すものと捉えられるならば、(c)に該当するものということになる。

推量の意の2例のうち、「長きほだしとなりなむ」(夕霧 一三二五②)の「ほだし」は成仏の支障の意で⑩、話し手にとって望ましくない事態と言え、(a)に該当する。

もう1例の「何事も思ひ入れず」は、宇治の中の君が⑯ 「(薫の自分への懸想が) 思ひ離れなば、さらに何ごとも思ひ入れずなりなむ」 (東屋 一八三〇⑬)

と、薫の自らへの恋慕が無くなれば自分は不安のない境遇になれるだろうというもので、これは中の君にとって望ましい事態であるが、薫の中の君への懸想は前年の大君死去後から続くもので、簡単に思ひ離れ」とは考え難いこととも言え、そのように捉えたと(c)に該当することになる。

【やむ+ナム】

分析の対象となるのは14例で、いずれも「ト」を下接している。

⑰ 「今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくてやみなむ」と思ひはてたり (帚木 七七⑬)

は、空蟬が源氏との仲に「胸いたく、さすがに思ひ乱」れながらも、その仲を終わらせようと決意する場面で、いずれもこのように(多くはなお心惹かれるところの残る)男女の仲を終わりにしよう・諦めようとするもので、これらは(c)に該当することになる。

「やむ+ム」は、疑問推量以外の文末用法の用例が源氏物語の中に存在しないが⑪、文中用法でかつ敬語を介しているものにもまだ範囲を広げると「また漏らせ給はでやませ給はむなん、御志にはべるべき」(蜻蛉 一九三六④)があり、これは浮舟の侍女侍従が、匂宮方の時方を通じて、浮舟失踪(死亡と思われていた)が表ざたにならないように訪問等を控えるよう要請するもので、男女関係そのものを終わりにしようということではない。

#### 四 「テム」の分析

小鳥聡子(一九九九)は、古今和歌集の「テム」を「多くは意志と解釈される」としているが、源氏物語においてもこの点に大差はないようであり、「ナム」のように「主に「推量」の意で用いられる」と見られるものは見出し難い、「主に意志の意で用いられるもの」と「意志・推量双方の意で用いられているもの」の二つとということになる。

四-1 主に意志の意で用いられているもの

【変ふ(下二段)+テム】

上接動詞が「変ふ」(下二段)である「変ふ+テム」は、3例全て意志の意に解され、内訳は

終止形単独1 「ト」下接2

である。いずれも

⑱ (宇治の大君の心内)「もし命しひてとまらば、病にことつけ



てかたちをもかへてむ<sup>1</sup>

(総角 一六五八①)

のように、女性が「かたち」を変える(「出家する」)例で、その点「(尼に)なりなむ」の場合と共通するところがある。なお右の例の大君は死期が近い状況であるが、出家の真の動機はそれではなく、薫との結婚から逃れるためである(同様の例1例)、他の1例は前尚侍の玉鬘が出家しようとするものである(竹河 一七〇九②)。これらは「なる+ム」の出家の意の例と同じことが考えられ、そうなる(と(c))に相当することになる<sup>12</sup>。

一方、「ツ」を介さずに直接「変ふ」に下接する「変ふ+ム」の当該例は2例で

⑱ (病の紫上を) 試みに所をかへ給はむとて、二条院に渡し奉りたまひつ。(若菜下 一一六九⑬)

は、特に困難・障害・抵抗を乗り越えてのこととも思われぬ(他の1例は歌での「身にかへむ」「夕霧 一三三五⑤」)。

「渡す+テム」

「渡す+テム」は3例全てが意志の意で、いずれも「ト」を下接する。全て男性が女性(それも正規の婚姻関係や保護者・非保護者等との関係にはない女性)の居所を移す場面での使用である。

⑳ 「しばし人にも口がためして、わたしむ」と思し(若紫 一八八⑫)

は源氏が若紫を自らのもとに引き取ろうという例であるが、「父宮の尋ね出でたまへらむも、はしたなうすずるなるべきを」といった懸念の伴う行為であり、それを強いて行おうとする意志の表現である点、(c)に相当する。他の2例は、薫が浮舟を引き取ろうというものだが、「はなやかに言ひなす人やあらむ」と、人の噂が気になる行為であり、同様のことが言えそうである。

一方「渡す+ム」の当該の用例は、やはり薫が浮舟を引き取ろうという場面での「やがてその日(浮舟を空いた家に)渡さむ」と思

かまふ<sup>1</sup>(浮舟 一九〇一①)というものがあるが、「たてまつる」等の敬語を介する例も加えて考えると6例程が追加され、その中の

㉑ 「いとかなう思し入りたまひそ。今日明日渡したてまつらむ」(若紫 一八六⑧)

は、父親である兵部卿官が若紫を自邸に引き取ろうとする発言の例である。他に、鬚黒の北の方の父兵部卿官が北の方を自邸に(真木柱 九四一③)、源氏が玉鬘を六条院に(七四四③)等、父親や父親代りの者が、被保護者の女性を引き取ろうとする行為を述べた例が見られ、これらは、特に困難や障害が伴う行為という認識が話し手には無さそうに思われる。

#### 四・2 意志・推量双方の意で用いられているもの

上接動詞が「許す」である「許す+テム」は、意志・推量各2例が見られ、内訳は

「ト・ナド」下接3(意志2・推量1) 「ナ」下接1(推量1)である。意志の意の例として

㉒ (雲居雁と夕霧のことを)「さるべきついであらば、人の御言になびき顔にてゆるしてむ」と思す。(行幸 八九六⑤)

は、内大臣が雲居雁と夕霧の間を許そうというもので、少女巻で二人の仲を裂いた内大臣の立場からすると、簡単にはそうし得ないところもあるところであろう。他の1例は宇治の八の宮が姫たちの相手となる男が「思すさま」ではなくても誠実に世話をしようという男なら「知らず顔にてゆるしてむ」(推本 一五五二⑭)というので、これも「思すさま」ではないという困難・障害を乗り越えてしようというものと捉えられ、そうなる(と(c))に相当することになる。

推量の意と解される2例のうち

㉓ (源氏→紫の上)「今宵ばかりはことわりと許し給ひてん」(若

## 葉上一七四一④

は、女三の宮との新婚三日の夜を迎えた光源氏の発言で、「勸奨」の意とも解せそうであるが、(b)に相当する「推量」だとすれば、許すのは困難であるという紫の上の心情を汲んだ上で「その困難を乗り越えて許してください」という、紫上への配慮をこめた表現ということになる。もう1例は「少将も見つけて、我なりけりと思ひあはさば、さりととも罪ゆるしてんと思ふ御心おごりぞあいなかりける。」(夕顔 一四二⑬)というもので、軒端萩への手紙を蔵人少将に見つかつたとしても、蔵人少将は大目に見るだろうという源氏の推測であり、無理・困難の伴う内容を強いて推測する例と言え、やはり(b)に相当する。

「許す+ム」の例は同一資料内には文中用法しかないが、紫式部日記に意志の意の例として

⑭「和歌一つつ仕うまつれ。さらば許さむ」

(寛弘五年十一月一日 旧日本古典文学大系四七一⑨)

がある。道長が御帳の後ろに隠れた筆者と宰相の中将にかけた言葉で、「許しがたいところを強いて許そう」という脅しめいた発言と受け取ることもできるが、皇子の五十日の祝いの酒の上でのことであり、許すことに困難・障壁が伴うと本気で思っているわけではないであろう。

以上「テム」に関して見てきた範囲では、意志の意のものは(c)に該当することが多く、推量の意のものは今回の検討の範囲では該当する用例数自体が少ないが、(b)に相当すると考えられるということになる。

## 五 課題・展望等

## 五・1 前節のまとめと課題

前節で「動詞+ナム・テム」について検討した結果、(a)望ましくない事態が起きることに対する推量  
(b)そのように考えるには困難の伴う内容の推量  
(c)困難・障害・抵抗が伴う(と想定される)ことを、それを

乗り越えて実行しようとする意志の表現

のいずれかに該当する例が多くを占めるということが、一応の傾向として認められた。

一方、比較の対象となる「動詞+ム」では右の(a)(b)(c)に該当する例もあればしない例もあるといったところで、「動詞+ナム・テム」が有標的なものとすれば、こちらは無標といった位置づけになるだろうか。以上が第一節で掲げた②の点についての一まずの答えとなる。

もつとも本稿での議論は、一つの資料の中で、しかも「ナム」「テム」が一部の動詞に下接する場合を選んでの論に過ぎないし、「ヌ」「ツ」を介さない「ム」との比較も、まだ不十分な点がある。これが「ナム」「テム」にどの程度普遍的かつ客観的に言えることであるのかには、まだ検証を要するところが多々あると言わなければならないだろう。

## 五・2 「危惧」「可能」「勸奨」等の意味との関連

次に、「ナム」「テム」の意味として「推量」「意志」以外に挙げられることがあるものとの関連についても整理しておこう。

問題点⑤として掲げた「危惧」の意との関連については、「危惧」を「望ましくない事態が起きる可能性がある」と判断・推測し、それを「危ぶむ」ことであるとすれば(a)に該当する「ナム」が「危惧」の意でも解釈し得ることによると理解できそうである。なお前述のように近藤明(二〇一三)(二〇一四)で「テム」は危惧表現形式

の候補としては挙げられなかったが、前節の分析で「テム」に(a)に該当するものが無かったことは、これと符合するものと言えようか。

「可能(的推量)」の意については問題点②として掲げたが、「可能」「不可能」といったことが問題になる場合 について、『日本文法大辞典』に用例が掲げられている和歌集二〇番歌の「若菜摘みてん」と、時代がやや降るが徒然草一〇九段の「飛び降るとも降りなん」を現代語に置き換えた文を例に、少し考えてみたい。

「明日も春雨が降れば、若菜を摘むことができるだろう」「飛び降りても降りられるだろう」と可能表現を用いるのは、前者であれば、今はまだ摘める状態ではない(が、草木の生長を促す春雨が今日に続いて明日も降れば摘めるようになると思われる)場合<sup>(1)</sup>、後者であれば、なお多少なりとも危険・困難も伴いそうな場合ではあるまいか。前者では、(春雨が降っても降らなくても)あと一日すれば問題なく若菜が摘める状態であれば、単に「若菜を摘もう」とでも言いそうなのであるし、後者では、全く何の危険・困難を伴わない高さであれば、やはり「可能」「不可能」といったことは問題にならず、「飛び降りるだろう」とか、一人称であれば「飛び降りよう」と、可能表現形式を伴わない単なる推量や意志の意を表す言い方が選ばれるように思う。可能の意を伴った形式が選ばれるのは、何らかの困難・障害・問題点が伴う中、能力や状況からしてそれを乗り越えて実現し得る(あるいはし得ない)を判断し、述べる場合ではないか。

このように考え得るとすれば、「ナム」や「テム」に「可能」(の意を伴った推量や意志)と解釈できるものがあるのは、(b)(c)の性格と関連して、そこから派生したものと考える途がありそうに思う。

問題点③として掲げた「勸奨」の意味については、「ム」の用法の中に「相手に対して勧誘・命令する意を表わす」(『日本文法大辞典』「ム」の項。吉田金彦)とされるものとの関連が考えられるところであろう。川上徳明(二〇〇五)は、命令形による命令表現(①型)を推量表現によって和らげたのが「ム」「ナム」等の推量形式による勧誘・勸奨・懇渾の表現とする。

この「勸奨」の意と解される「ナム」は、第三・四節で分析の対象となった範囲では、前掲の用例②③がそれに該当する可能性に触れたが、他に「参り+ナム」の次の1例が該当する。

②⑤(匂宮の使いの時方↓浮舟の女房侍従)「なほとくとく参りなむ」と言ひ騒がして、この侍従をゐて参る。

(浮舟 一九二②)

藤原浩史(二〇一四)は第一節に掲げた源氏物語夕顔巻の「ナム」を「せたまふ」が付加され、源氏に対して畏敬の念が払われつつも、源氏がこのまま夕顔とともにいる自由はない」としており、この場合の時方と侍従の間にも同様のことが言えそうである。ただ勧誘・命令の「ム」の例としてよく引かれる源氏物語少女巻の「鳴り高し。鳴りやまむ」(少女 六七〇⑬)と比べると、藤原も「先生口調」「しかり飛ばす様」とする「鳴りやまむ」よりは、②にせよ夕顔巻の例にせよ、ある程度配慮のある表現のようにも感じられる。

では「ム」と「ナム」に右のような差があるとして、その違いは何に由来するのか。(a)(b)(c)に共通するのは、何らかの困難・障害の想定ということであったが、この場合困難を察しながらの「勸奨」、すなわち夕顔巻の例であれば、立ち去りがたそうにしている源氏を見て「困難ではあるだろうが、はやくお帰りください」、②⑤の例であれば、歩きなれていない相手が歩きづらそうにしているのを見て、「困難ではあるだろうが、はやく来てください」といった、

相手の困難さを慮った言い方という解釈はできないだろうか。

もつともこの種の推量系形式による命令・勸誘・勸奨表現については、命令形による表現との関係、「ムヤ」「ナムヤ」「テムヤ」等の疑問詞が付加された形とそうでない形の関係「ム」と「ナム」「テム」の関係等、意見の別れる部分<sup>(15)</sup>、解明の進んでいない部分が多く、この考えも仮定の上に推論を重ねた観は否めない。ただ、本稿のごとき視点が、右のような待遇表現・配慮表現の問題と関わってくる可能性にも目が向けられてよいとは思われるし、その面の考察に新たな見方を提供できるところまで進めていくことができればと考える次第である。

### 注

(1) 源氏物語を資料として選んだのは、まとまった分量・用例数があり、同一資料内で、同じ動詞に「ナム」「テム」が下接した場合と、「ヌ」「ツ」を介さずに「ム」が下接するものの比較等を行いやすいこと、本文研究が進んでいること等による。

(2) ただし「婉曲」「仮定」といった意味を認めることには批判的な意見があり(碁石雅利(二〇一一)等)、また「ム」の終止用法と非終止用法(「ト」で引用される形を含む等、本稿の「文中用法」とは多少異なるが)の意味の幅はほぼ重なるとの見解(尾方理恵(一九九六))もあり、筆者もそれに共感する立場をとるものである。

(3) 疑問推量形式をとっているもの(「ヤ」と呼応して「ヤーム」の形になっているもの等)にまで対象を広げれば、「心苦しきもの思ひ」「苦しきこと」「これよりなごりなき方にもてなしきこゆる」(各1例)が加わり、そうなると(a)の性質を持つものが多数を占める点で「ナム」と大差ない結果となる。だが、近藤明(二〇一三)等で、古代語における危惧表現に与る形式の候補をリストアップした際、「ヌベシ」や「ナム」と並んで、疑問推量形式「ヤーム」等もその候補として挙げられたが、「危惧」を「望ましくない事態が起きる可能性がある」と判断し、それを危ぶむ気持ちを表すこと」だ

とすれば、「望ましくない事態」に偏るように見えるのは、疑問推量形式が危惧と親近性を有することによることも考えられる。そのため本稿では「ナム」「テム」あるいはそれとの比較対象となる(「ヌ」「ツ」を伴わない)「ム」の考察においては、疑問推量の形をとるのは原則として除外するのが適切と判断した次第である。

(4) 次の例は意志の意に解されるが、「あり」が「て(は)」に下接する補助動詞的なものであるため、ここでは除外される。

(源氏との対面をうながされた末摘花)「いらへきこえて、ただ聞けとあらば、格子などさしてはありなむ」

(末摘花 一一二(4))

源氏との対面に気の進まない末摘花が格子を閉めてなら逢おうという例であるが、本人の気が進まないという困難・抵抗、あるいはそういう逢い方をするのは難しい相手かもしれないという困難・抵抗を乗り越えてそうしよう、という解し方ができるとすれば、後述の(c)に該当することになる。

(5) 強いて言うならば「すこしけ近きほどを許」されることを望む蜜宮に対し、玉鬘があまり乗り気でない様子であるのが、困難・障害と捉えられる面もあろうか。

(6) 「(自分のことは)おのづから聞き給ふやうもあらん」(帚木七〇⑨)という例は、未来推量ではない(源氏が空蟬に自分のことは既に聞いているであろうと述べている)点で「ありナム」と条件が異なりはするが、話し手にとって好ましくないことの推量ではなく、そう推量することに困難が伴うものとも考えられない。

(7) 若紫巻には源氏が「とのゐ人にて侍らむ」(一八三⑤)と述べる例がある。

(8) この2例のうち、「勸奨」の意に解される1例は第五節に引く用例<sup>(25)</sup>である。他の1例は

(光源氏↓少納言)「よし、後には人々も参りなむ」

(若紫 一九〇⑪)

というもので、若紫を連れ出そうとした源氏が「人ひとり参られよかし」と小納言にも同行を命じたのに、すぐにはついて来ようとし

なかったという状況での発言であり、単純な「推量」ではなく、「適当」とするのも不十分で、不満を残しながらの「許容」といったところか。

(9) 返事を受け取ってから帰ろうとの意向を示して、暗に返事を早くすることを促していることも考えられる。

(10) この場合は、落葉の宮が夕霧との件で雲居雁の怒りを買うことになっては、成仏の支障になるということ。

(11) 複合動詞とされるものに範囲を広げると「鳴り高し。鳴りやまむ」(少女 六七〇<sup>⑬</sup>)があるが、この場合の「ム」は「推量」や「意志」ではなく「勧誘・命令」の意とされるものである(第五節参照)。

(12) 他資料では「乳母かへてむ」(枕草子)上に候ふ御猫は一段新編全集三九<sup>⑩</sup>)といった、(c)に該当しそうにない例も見られる。

(13) 小島聡子(一九九九)は、右の例も含めて古今集の「テム」は多くが「意志」と解され、推量と解されるものは「可能」の意の有無が問題とされている例であるとしている。

(14) 片桐洋一『古今和歌集全評釈』は、歌の配列順からして「明日もまた降ったならば、濡れてでも若菜を摘んでしまおう」という意だとする。その場合「可能」の意を伴わないことになるが、「濡れてでも」が「困難・障壁」に相当するであろうから、(c)に該当することにはなる。

(15) 川上徳明(二〇〇五)は、命令・勧誘表現を

①型 命令形による直接的な命令表現／②型 推量形式による婉曲な命令・勧誘表現／③型 推量―疑問(問い)／④型 反語：否定の形式による最も婉曲・間接的な命令・勧誘表現の四段階に分け、①↓④の順で婉曲・間接の度が強まるとする。一方 藤原浩史(二〇一四)は「むしろ逆順であると考える」とするが、③型に相当する(軽負命婦↓母北の方)「忍びてはまゐり給ひんや」(源氏物語 桐壺 一一二<sup>⑨</sup>)の例等、①型や②型と比して「逆順」と言えるかどうか。(藤原の考えでは「明確な命令であり、相手は従わざるをえない内容」ということになりそうだが、母北の方は参内を辞退したまま亡くなっている)

#### 参考文献

- 井島正博(二〇一)『中古語過去・完了表現の研究』(ひつじ書房)
- 伊藤慎吾(一九七八)『源氏物語の助動詞完了態用例の新研究(上)』(風間書房)
- 尾方理恵(一九九六)「推量の助動詞の終止法と非終止法―源氏物語における「む・らむ・けむ」」(山口明德教授還暦記念国語学論集)明治書院)
- 小田 勝(二〇一五)『実例詳解古典文法総覧』(和泉書院)
- 川上徳明(一九七三)「助動詞「つ」「ぬ」の確述的用法」(『王朝』六のち川上徳明(二〇〇五))
- 川上徳明(二〇〇五)『命令・勧誘表現の体系的研究』(おうふう)
- 碁石雅利(二〇一)「助動詞「む」の「仮定」と「婉曲」」(聖徳大学言語文化研究所論叢)一八)
- 近藤 明(二〇一三)「中古における危惧表現をめぐって―「モゾ」「モコソ」とその周辺―」(『国語語彙史の研究』三二 和泉書院)
- 近藤 明(二〇一六)「危惧表現形式の一環としての複合助動詞「ヌベシ」「ツベシ」の位置」(『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』八)
- 鈴木泰(一九九二)『古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の分析―』(ひつじ書房)
- 内藤聡子(一九九〇)『源氏物語』における「つべし」「ぬべし」(愛知大学『国文学』三〇)
- 永野賢(一九五三)「表現文法の問題―複合辞の認定について―」(『金田一博士古稀記念言語・民俗論叢』三省堂)
- 橋本研一(一九七二)「つべし」と「べし」の原義」(『金田一博士古稀記念論叢』三省堂)
- 藤原浩史(二〇一四)「平安・鎌倉時代の依頼・禁止に見られる配慮表現」(野田高山・小林編『日本語の配慮表現の多様性』くろしお出版)
- 山本佐和子(二〇一三)「ツベシ」と「ツベシイ」(『日本語の研究』八・一)
- Brown & Levinson(1978, 1987) *Politeness* Cambridge University Press (田中典子他訳『ポライトネス』研究社 二〇一一年による)